

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02212

研究課題名(和文)「キリスト教学」の範型としてのシュライアマハー＝トレルチ的伝統の再検証

研究課題名(英文) The Re-examination of the Schleiermacher-Troeltschian Tradition as the Model of Christian Studies

研究代表者

安酸 敏眞 (YASUKATA, TOSHIMASA)

北海学園大学・学長

研究者番号：40183115

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「キリスト教学」の理念を再検討するために、シュライアマハーとトレルチに焦点を絞って、「キリスト教の文化科学としての神学」の可能性を複数の角度から検証した。研究の成果は、シュライアマハーの『キリスト教信仰』の全訳を遂行したこと(翻訳は間もなく教文館から刊行される予定)。F・W・グラフ博士を日本に招待して、北海学園大学、京都大学、東京大学などで講演やシンポジウムを行った。その講演内容を『真理の多形性』として刊行した。日本宗教学会第78回学術大会で口頭発表し、それを論文「シュライアマハーの『キリスト教信仰』についての一考察」『人文論集』第68号、179-189頁に掲載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「キリスト教学」という学問は、わが国の京都大学ではじめて成立したもので、そこには波多野精一と有賀鐵太郎の格別の尽力があった。この二人は19世紀ドイツの学問的神学から多くを学び、とりわけシュライアマハーとトレルチから多くを取り入れた。ところが、今日わが国のキリスト教学は迷走気味で、本来のあり方から大きく逸脱していると言わざるをえない現象が多々見られる。筆者はこのような状況に危機感を覚え、シュライアマハー＝トレルチ的伝統をもう一度正しく見直すべきであると考え、本研究の計画を立てて実行した。この研究の一環として、シュライアマハーの『信仰論』の完訳を成し遂げたことは、大きな意義を有している。

研究成果の概要(英文)：I have carried out a research on the possibility of a "theology as cultural sciences of Christianity," with a focus being placed on Schleiermacher and Troeltsch. The results of this research are as follows. (1) As part of the research, I have completed a translation of the entire corpus of Schleiermacher's magnum opus *Der christliche Glaube* from the German original. The translation will come forth from Kyobunkwan Publishing. (2) I invited Dr. Friedrich Wilhelm Graf to Japan for lectures and symposiums held in Sapporo, Kyoto, and Tokyo in October. The lectures and symposiums delivered by him were published as "Polymorphous Truth" by Hokkai-Gakuen University Press. (3) I read a paper on Schleiermacher's Christian Faith at the 78th annual convention of Japanese Association for Religious Studies in September. My paper entitled "A consideration of Schleiermacher's Christian Faith" has appeared in *Journal of Humanities*, no. 68, pp. 179-189. I have also contributed papers to publishers.

研究分野：キリスト教学

キーワード：キリスト教学 シュライアマハー トレルチ 波多野精一 有賀鐵太郎 学問的神学 リベラルプロテスタンティズム 信仰論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は長年キリスト教学の分野で研究を続けてきた。「キリスト教学」全般についての再検証としては、「トレルチと『キリスト教学』の理念」(『基督教学研究』第25号(2005年)191-212頁)、「いま「キリスト教学」を問う 学問史的考察」(『キリスト教学』再考』(2009年)1-18頁)、「キリスト教理解とその方法について」(『キリスト教学』再考』(2009年)35-51頁)などで自分の見解を公表してきた。

近代プロテスタンティズムに関しては、*Ernst Troeltsch. Systematic Theologian of Radical Historicity* (Atlanta: Scholars Press, 1986)、『レッシングとドイツ啓蒙 レッシング宗教哲学の研究』(創文社、1998年)、『歴史と探求 レッシング・トレルチ・ニーバー』(聖学院大学出版会、2001年)、*Lessing's Philosophy of Religion and the German Enlightenment* (New York: Oxford University Press, 2002)、『歴史と解釈学 ベルリン精神の系譜学』(知泉書館、2012年)の著書や、トレルチ『信仰論』(教文館、1997年)、F・W・グラーフ『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』(聖学院大学出版会、2001年)、K・バルト『十九世紀のプロテスタント神学 中・下』(新教出版社、2006-2007年)、F・W・グラーフ編『キリスト教の主要神学者 下』(教文館、2014年)、シュライアマハー『キリスト教信仰』の弁証『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』(知泉書館、2015年)などの翻訳によって、本研究に取り組むための十分な準備をしてきた。

それ以外にも、シュライアマハー、アウグスト・ベーク、ドロイゼン、ディルタイ、ヨアヒム・ワッハなどの研究を通して、近年、解釈学についても造詣を深めてきており、研究課題として掲げたテーマを扱う解釈学に関する理論的基礎も築いてきた。

## 2. 研究の目的

本研究は、わが国において独自に成立・発展した「キリスト教学」(Christian Studies)の理念を再検討するために、Neuprotestantismus と称される19世紀ドイツの「学問的神学」(Wissenschaftliche Theologie)の伝統とその神学的遺産を、その出発点(シュライアマハー)と到達点(トレルチ)に即して問い質し、「キリスト教学」の範型としての「キリスト教の文化科学としての神学」(Theologie als »Kulturwissenschaft« des Christentums)が可能かどうかを検証することを目的としていた。そこには、かかる学問史的検証作業を通して、混迷するわが国の「キリスト教学」に対して積極的な提言を行いたいとの願いが潜んでいた。その背景と理由を以下に少し詳しく述べ、研究目的をより具体的に説明してみたい。

今日「キリスト教学」は、神学のパラダイム・チェンジのせいもあって、迷走している感が拭えない。「キリスト教学」という学問は、1922年に京都帝国大学文学部において産声を挙げた。「キリスト教の学術研究のため」に設立されたこの講座を最初に主宰したのは、宗教哲学三部作で知られるあの波多野精一である。その後波多野を継いだ有賀鐵太郎の呼びかけによって、1952年に「日本基督教学会」が設立された。有賀の後を受けた武藤一雄と水垣渉も、大学と学会の双方において、神学とは異なる「キリスト教学」の理念の確立のために尽力したが、今日学会員数の増大と学会活動の盛況とは逆比例的に、「キリスト教学」の理念は曖昧になり、もはや神学と「キリスト教学」の異同と関係性に注意を払う者はほとんどいなくなった。その結果、厳密な学問的手続きを踏まず、神学とも「キリスト教学」とも覚束ない議論が横行している。筆者はこの状況に危機感を募らせ、自ら学問史的研究を通じて「キリスト教学」の理念を明確化に努めてきた。

それでは、「キリスト教学」の本質規定の根拠は、いずこに求められるべきであろうか？ 筆者の見立てでは、わが国の「キリスト教学」のルーツは、19世紀ドイツの「学問的神学」に存している。京都大学キリスト教学講座の初代の担任者の波多野は、1904-06年にドイツのハイデルベルク大学とベルリン大学に留学して、ハルナック、トレルチ、宗教史学派などの講筵に列し、当時隆盛を極めていた「学問的神学」の理念と方法をわが国に持ち帰った。1922-25年に同志社大学からアメリカに留学した有賀も、スタート時の問題関心は教父学ではなく、近代神学者のシュライアマハーとトレルチであった。アメリカ留学時代の恩師マツギファトは、自らドイツに留学してマールブルク大学でハルナックの薫陶を受けた歴史神学者であった。これらの事実から推測されるように、わが国で産声を挙げた「キリスト教学」が、その理念と方法の両面において、シュライアマハーからトレルチに至る19世紀ドイツの「学問的神学」を揺籃としていることは、間違いない。

さて、19世紀ドイツの「学問的神学」は、シュライアマハーをもって嚆矢とする。「近代神学の父」と称される彼は、18世紀の啓蒙主義によって伝統的キリスト教神学が知的威信と学問的妥当性を失ったなかにおいて、宗教が形而上学にも倫理にも還元できない固有の領域を形づくることを確信し、「宗教の本質は、思惟でも行為でもなく、直観と感情である」(『宗教論』第二講)、キリスト教信仰共同体の「ひとつの実証的な学」としての神学を、普遍的な諸科学の中に秩序づけることを通じて、神学の再建を図ろうとした。彼はキリスト教信仰と近代文化との間に「永遠の契約」(ein ewiger Vertrag)を樹立し、近代の学問=文化意識とキリスト教を総合しようと試みた。その記念碑的成果が、『福音主義教会の原則にもとづいて組織的に叙述されたキリスト教信仰』*Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt* (1821-22; 2.

Aufl., 1830-31) (通称『信仰論』)である。これは『入門的講義の便宜のための神学研究の短い叙述』*Kurze Darstellung des theologischen Studiums zum Behuf einleitender Vorlesungen* (1811; 2. Aufl., 1830) (通称『神学通論』)に示された神学的綱領に従って、倫理学、宗教哲学、弁証学の助けを借りて、キリスト教信仰を一種の「文化科学」(Kulturwissenschaft)として提示しようとした画期的著作である。

19世紀後半から20世紀初頭にかけてのプロテスタント神学は、シュライアマハーの範に倣って、こぞって「文化科学としての神学」たらんと欲した。20世紀初頭に、シュライアマハーの路線を最も自覚的に継承したのは、Neuprottestantismusの最終走者となったトレルチである。トレルチは「現代の精神的ならびに宗教的な生に定位するという課題」を、キリスト教神学の最重要な用務と見なし、シュライアマハーに倣って、神学を倫理学と宗教哲学との上に基礎づけようとした。彼の思想発展の顕著な特徴である、神学から宗教哲学、宗教社会学、精神史・文化史、倫理学、歴史哲学への漸進的傾斜は、神学を現代の苦境から救出し、新たな学問的明晰性を付与することによって、それを歴史的文化科学として再建しようとするところに目標をもっていた。トレルチ研究の泰斗F・W・グラーフによれば、トレルチは神学を「キリスト教を歴史学的・解釈学的に研究する文化科学」に「作り変える」ことを、終始一貫して目指していたのである(F.W. Graf, „Ernst Troeltsch: Theologie als Kulturwissenschaft des Christentums,“ in *Theologen des 20. Jahrhunderts*, hrsg. v. P. Neuner & G. Wenz [Darmstadt, 2002], 53-69)。

しかし1920年代に台頭してきた弁証法的神学、とりわけバルト神学は、「教会の学としての神学」(Theologie als kirchliche Wissenschaft)という主張を全面に掲げ、シュライアマハーからトレルチに至る「学問的神学」に対して、決然として「否」を突きつけた。バルトによれば、神学は聖書において証言されている神の啓示についての「キリスト教教会の学問的自己検証」であり、かかる意味において「教会の機能」である。それゆえ、宣教の場としての教会を離れた「文化科学としての神学」は、神学としては邪路に陥ったものである。近代自由主義神学の基本構造は、「福音主義的な敬虔な自己意識」と「近代ヨーロッパの文化意識」であれ、「イエスによる罪の赦し」と倫理的な「神の国」であれ、あるいは「キリスト教の本質」と「近代的な歴史的理性」であれ、畢竟、**神的な焦点**と**人間的な焦点**の並存によって特徴づけられる。しかし神学の課題をこのような二極構造の楕円図式で捉えると、いつの間にか**神的な焦点**が**人間的な焦点**の中に吸収されてしまい、神学の「人間学化」が起こらざるを得ない。バルトは、シュライアマハーからトレルチに至る過程で生じているのは、まさにかかる事態であると断じ、近代文化と融和的なプロテスタント神学を「文化プロテスタンティズム」(Kulturprotestantismus)として厳しく断罪した。

バルト神学が世界の神学界を席卷した約40年間、シュライアマハーからトレルチに至る神学は、「過ぎ去ったもの」として「實際上禁止されていた」(J.L.アダムズ)。しかし1970年以降、ドイツでもアメリカでも状況が大きく変化し、Neuprottestantismusが再評価される動きが起こっている。ドイツでは80年代から、シュライアマハーとトレルチに関して、Kritische Gesamtausgabe (KGA)という批判的全集を刊行する大きなプロジェクトが進行し、夥しい数の新しい研究がなされつつある。しかしわが国では、19世紀のドイツ神学を学ぼうとする学生は激減し、現代的な流行りのテーマに飛びつく傾向が強まっている。「キリスト教学」の混迷はこうした動向と無関係ではない。

筆者はトレルチ研究から出発し、啓蒙思想家レッシングを通して、いまやシュライアマハー研究へと導かれているが、この間近代プロテスタント神学史についても、複数の著書や翻訳書を上梓してきた。かかる一連の学問的作業を通じて痛感したのは、「近代神学の父」と称されるシュライアマハーの主著が、刊行から200年近く経ったいまも、信頼できる日本語で読めるようになっていないことである。彼の神学についての本格的な研究書はわが国には存在しない。こうした事態に鑑みて、筆者は自らの研究者人生の最後の大作として、シュライアマハーの『信仰論』を正面から取り上げ、精密な原典研究を通して、その全貌を明らかにすることを決意するに至った。『信仰論』を精読・読解する作業は、その副産物として本邦初の完訳書をもたらすことが期待された。しかし本研究はそれにとどまらず、トレルチに至るNeuprottestantismusの神学理念そのものの検証を行うことも目指した。

### 3. 研究の方法

シュライアマハーからトレルチに至る19世紀ドイツの「学問的神学」の本質的特質を解明するために、筆者は二通りの方法を使った。一つはシュライアマハーとトレルチの「神学的学問論」を比較検討することである。これは精神諸科学あるいは文化諸科学のなかに、神学をいかに秩序づけるかというという課題と結びついていた。もう一つは狭義の神学であるところの「信仰論」(Glaubenslehre)の中身を検討することであった。批判者たちによって断じられた、福音の心理学化、歴史学化、人間学化などの批判がどこまで妥当かを、ここで検証しようとした。このように、シュライアマハーとトレルチの「神学的学問論」の検討と、両者の「信仰論」の内容の分析とが、本研究の二つの大きな柱として据えられた。

Neuprottestantismusの神学、すなわちシュライアマハーからトレルチに至る19世紀ドイツの「学問的神学」は、「出発点」(a quo)に位置するシュライアマハーの有名な「永遠の契約」(ein ewiger Vertrag)という概念によって規定されている。すなわち、キリスト

教信仰と近代文化との間に「永遠の契約」を樹立することは、近現代の神学にとって最も重要な責務であり、もしこの課題をなおざりにすれば、「歴史の結び目がばらばらにほどけて、キリスト教が野蛮と、そして学問が不信仰と同一視されるようになる」というのである。

そこから Neuprotestantismus の神学にとって、神学を精神諸科学あるいは文化諸科学のなかにいかに位置づけるかという学問論が、重要かつ喫緊の課題となる。シュライアマハーは『神学通論』によってこの課題に応えており、トレルチもその著作のいろいろな箇所ですら神学的プログラムを描写している。しかし神学を精神諸科学あるいは文化諸科学の全体連関のなかに秩序づけることは、神学を一種の「歴史的・解釈学的文化科学」(eine historisch-hermeneutische Kulturwissenschaft)に「作り変える」ことにほかならない。だが、かくのごとく構想された「学問的神学」が「キリスト教の文化科学」(Kulturwissenschaft des Christentums)あるいは「キリスト教学」(Christentumswissenschaft)に到着せざるを得ないことは、ほぼ自明な事柄であろう。わが国で成立した「キリスト教学」はここにその範型を有している。しかしながら、バルトが主張したように、神学が畢竟「教会の学」であるとすれば、「歴史的・解釈学的文化科学」であろうとする「学問的神学」は違法(illegal)な神学であると言わざるを得ないであろう。ここに神学概念をめぐる19世紀の「学問的神学」とバルト神学の決定的な分岐点が存在する。わが国の「キリスト教学」の現在の混迷は、シュライアマハーからトレルチに至る「学問的神学」に掉さしながら、この根源的事実を直視することなく、意識的あるいは無意識的にバルト的な神学概念を志向していることに起因している。いわば「存在と意識の分離」である。本研究はこの問題に深くメスを入れることになった。

もう一つの重要な課題は、「信仰論」として再建されたキリスト教教義学の「キリスト教的特性」(Christlichkeit)を検証・吟味することである。バルトは、「神学が学問として可能であるかどうかを決定するのは、神学者が資料を読み、歴史的事実そのものを考察し、歴史的連関を洞察するかどうかではなく、教義学的に思惟することができるかということである。シュライアマハーは学問としての神学の可能性を、みずからの教義学を書くことで証明しようと試みた」と述べている。傾聴すべき洞察ではあるが、検討を要する点も大いにある。なぜなら、シュライアマハーは、自らの教義学的体系を「教義学」(Dogmatik)と呼ばず、「信仰論」(Glaubenslehre)と名づけたからである。「教義学」から「信仰論」への移行は意味深長である。トレルチは自ら教義学的著作を刊行しなかったが、ハイデルベルク時代の講義ノートに基づいて、弟子のル・フォールによって遺稿『信仰論』(1925)が出版された。筆者は自らこれを翻訳したので、「信仰論」が Neuprotestantismus の「終点」(ad quem)においていかなる相貌を有するかを、きわめて明確に掴んでいる。しかし問題は出発点たるシュライアマハーの『信仰論』である。これについてはわが国には不完全な抄訳とダイジェスト訳 大島豊『シュライエルマッハアの信仰論』(第一書房、1934年)、三枝義夫訳『信仰論序説』(長崎書店、1941年)、今井晋訳『キリスト教信仰(抄)』(『現代キリスト教思想叢書』第1巻〔白水社、1974年〕所収)、松井睦訳『信仰論 下巻』二分冊(シャローム印刷、2013-14年)しか存在せず、その全貌は不明であり続けている。これは本邦知識人の知的怠慢以外の何物でもない。

筆者はアメリカ留学時代に、英語版 *The Christian Faith*, trans. H. R. Mackintosh and J. S. Stewart (Edinburgh, 1928) でシュライアマハーの『信仰論』を通読した経験をもつ。ドイツ語原典研究としては、過去三年間の蓄積があり、序論部分についてはすでに訳稿を作成していた。そこで本研究の一環として、本論に関しても今後四年をかけてすべてを訳出する計画を立てた。なお、この大事業に取りかかるための予備作業として、『信仰論』の解釈にとって決定的に重要な、フリードリヒ・リュッケ宛の二通の書簡を、『『キリスト教』の弁証 『信仰論』に関するリュッケ宛の二通の書簡』としてすでに上梓していた。

具体的な研究方法としては、難攻不落な城塞にも譬えられるシュライアマハーの『信仰論』を、精密な文献学的技法を駆使して読解し、それを正確かつ流暢な日本語に翻訳する作業をしながら、彼の神学思想の基本的特質を解明しようと試みた。伝統的なキリスト教教義学からの逸脱と Neuprotestantismus の斬新さを指摘することが、ここでの中心的な課題になると予想された。

テキストの解釈にあたって、これといった奇抜な技法を採ることはしなかった。それまでの研究においても、筆者はあくまでもテキストに向き合い、テキストが語りかける声に真剣に耳を傾ける方法を探ってきた。この方法の妥当性は、その研究成果によって実証されると考える。かかるやり方で「始点」のシュライアマハーの神学思想を把握し、その成果を「終点」のトレルチに連結して、Neuprotestantismus の神学理念の特質と問題性を、明らかにしようと考えた。その際、この自由主義的系譜に批判的に対峙したバルト、ブルトマン、ゴーガルテンなどの「神のフロント世代」の批判内容も、19世紀神学の神学理念と突き合わせて、翻って再検討した。このように、本研究は19-20世紀プロテスタント神学史のトータルな見直しをもたらすことになった。

#### 4. 研究成果

研究の最大の成果は、シュライアマハーの『キリスト教信仰』*Der christliche Glaube* の

本邦初の全訳を完遂したことである。この書は「近代神学の父」と称されるシュライアマハーの主著で、全部で1,100頁を超す膨大な分量に加え、ドイツ語としてもまた思想内容としてもきわめて難解であり、これまで200年近く完訳されたことのないものであった。翻訳作業は難攻を究めたが、4年がかかりでようやく完訳した。訳稿は2019年12月末に教文館に入稿し、2020年末までに刊行される運びとなっている。

二つ目の成果は、ドイツからトレルチ研究の第一人者であるF・W・グラフ博士(ミュンヘン大学名誉教授)を日本に招待して、トレルチとリベラル・プロテスタンティズムの再検証を行ったことである。2019年10月1日から18日にかけての滞在中に、北海学園大学、京都大学、東京大学などで講演やシンポジウムを行い、またその間のさまざまな機会に意見交換をした。そしてその成果を『真理の多形性—F・W・グラフ博士の来日記念講演集—』(北海学園大学出版会、2019年)として刊行した。全体の約三分の二を自ら翻訳し、長文の「解題」を執筆し、監修者として全体の編集に責任をもった。

それ以外には、9月に日本宗教学会第78回学術大会で口頭発表し、その内容を論文「シュライアマハーの『キリスト教信仰』についての一考察」を『人文論集』第68号、179-189頁に掲載した。また2、3年以内に刊行予定の『新版キリスト教大事典』(教文館)に、シュライアマハーとトレルチを含む近代プロテスタント神学史関係の重要項目——本研究と直接関連する項目としては、「近代プロテスタント神学史」、「シュライアマハー」、「トレルチ」、「解釈学」、「キリスト教の絶対性」、「レッシング」などを多く執筆し、また『越境する宗教史』(宗教史論叢25-26)(リトン、2020年11月末刊行予定)のために、論文「トレルチの宗教史の神学 越境性」を執筆した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安酸敏眞	4. 巻 63
2. 論文標題 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解（その二）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 29-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安酸敏眞	4. 巻 64
2. 論文標題 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解（その三）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 43-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安酸敏眞	4. 巻 NIL
2. 論文標題 トレルチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新キリスト教組織神学事典	6. 最初と最後の頁 281-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安酸敏眞	4. 巻 62
2. 論文標題 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解（その一）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 75-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 安酸敏眞	4. 発行年 2018年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 309
3. 書名 人文学概論 増補改訂版 人文知の新たな構築をめざして	

1. 著者名 安酸敏眞	4. 発行年 2016年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 510
3. 書名 欧米留学の原風景 福沢諭吉から鶴見俊輔へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----